

2018 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 優秀賞

私から始める三つの行動

(原文)

田中 紗世 (12 歳)

大阪府

大阪医科薬科大学 高槻中学校・高槻高等学校

「私なんかこの世の中にいなければ、みんなが幸せに暮らせるのに。そうしたらあの子が私をいじめる必要もなくなる。私さえいなければ」

私はこの言葉をずっと頭に思い巡らせていました時期がある。そして私は、まだあの恐ろしい出来事を覚えている。

小学生の時、転校した学校で私はいじめられた。あの子は私に敵意を持っていたのだろう。先生や周りに人がいる所では何もしないのに、帰り道や放課後に一方的に責められた。その言葉はナイフのようで、私の心を痛めつけた。その傷は今でも残っている。私は何も言えず、ただその時が過ぎるのを待った。心の中では言い返したいが、もっといじめられるかもしれない、という怖い思いに加えて悔しい、そんな気持ちがあった。次第に夕食が食べられなくなり、最後には朝食も食べられなくなった。見かねた母が先生に相談し、いじめはなくなった。

私は結局、誰にも相談できず我慢し続けたのだが、今、冷静になると、果たしてそれはよかつたのだろうかと考えてしまう。私がいなくなっても、いじめはなくならなかつたのではないか。むしろ別の子をターゲットに変え、エスカレートしていたかも知れない。

私は今まで、誰かがいじめているのを見たことがある。だが、見て見ぬふりをしてしまう。指摘したことで今度は自分がいじめられてしまうのを恐れているからだ。見て見ぬふりも間接的ないじめで、彼らを見捨てているのだと思う。

いじめている人は何か心に大きな不安を抱えていて、八つ当たりをしたり、寂しくて仲間が欲しいからいじめているのだと思う。そして、一人でもいじめ出したら、周りの人は合わせなくてはいけない雰囲気になり、広がってしまう。

いじめられている人は決して悪くない。その状況を我慢したり、無視して、無理に強くななくていい。それよりも誰でもいいから相談して欲しいと思う。

もし、いじめられている人がいることに気付いたら、その子を信じて何度もかばう。かばって自分が仲間外れにされるか、かばわずにその子が苦しんでいる姿を見続けるか、どちらがいいか、一人一人考えて欲しい。いじめは絶対に許されないと認識し、その場に出くわしたら、手を差し伸べてあげることを忘れてはいけないと思う。

そして、自分の何気ない一言が相手を傷つけていないか、気付いたらいじめる側にまわっていないか考えて欲しい。自分はそんなことは言っていない、関係ないと目を背けていないだろうか。私のように一度傷ついた心は元通りになることはない。

命には何にも変えられない価値がある。誰もが安心して毎日を過ごし、貴重な経験を重ね、素晴らしい人生を生きる権利がある。

私はいじめをなくしたい。いじめは人を死に追いつめる恐ろしい凶器だ。私の学校では絶対に起こしたくない。自分の学校だけでなく、他の学校、社会でもなくしていきたい。

まずは私から、三つの行動を心掛けようと思う。一. 挨拶する時は、笑顔を加える。二. 友達のいい所をほめる。三. 少しでも親切にしてもらったら、感謝の気持ちを伝える。そんな小さなことを積み重ねるだけで、いじめはなくせると思う。信頼関係を私から広げることで、私につながる全ての人を伝つて私の思いが届く信じている。一人一人の心掛けや、「相談にのるよ」の一言が、不安を抱える人を少なくさせると思う。次第にいい影響が、私のクラスから学校、さらには社会全体に広がつていって欲しい。相手の気持ちを想像する大切さ、苦しんでいる子が目の前にいるかも知れないということ。小さな心掛けを発信して、それを頑丈な太い束にして、必ずいじめの許されない社会にしていきたい。